

Museum News



絵：柳田 基

2025 展覧会

企画展

カラフル！日本の蔵書票
— 技ひかる小版画の世界 —
2025.5.19(月) ▶ 7.19(土)

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展

関学生の胃袋事情
— 食からたどる学生生活の変遷 —
2025.7.28(月) ▶ 10.4(土)
休館日：日曜日、祝日、
8月13日(火)～8月21日(木)
(ただし8月3日(日)は開館)

関西学院大学在学中の思い出の味はありますか。本展覧会では1889年の学院創立から2025年までを対象とし、食堂を中心に学生生活の歴史をご紹介します。卒業アルバムや学生手帳、学生生活案内の冊子、大学生協のパンフレットなどから、食生活の環境の変化や食堂のメニューの変遷をたどります。当時の学生生活に想いを馳せる時間となりましたら幸いです。

歴史をふりかえり、 キャンパスから平和を想う

前号(17号、2024年10月)のミュージアムニュースでもふれたように、関西学院大学博物館は、昨年度に開館10周年を迎えました。昨2024年度は、その周年企画として、平常展「ヴォーリズ建築写真展 VORIES TIME」、企画展「天を見あげて—関西学院のヴォーリズ建築—」の二つの展覧会を開催しました。多くのみなさんの支援をうけて、両展とも好評を持って企画を終えることができました。ここに改めてお礼を申し上げたいと思います。

このうち後者の企画展は、原田の森時代からの学院のヴォーリズとヴォーリズ建築事務所による建築群を網羅的に取り上げたもので、とくに上ヶ原キャンパスにかかる多くの建物・構造物は、私たちにとって身近なものでした。そこで示された内容のなかで、例えば、「東京庵」が原田の森時代からの歴史を持っていることや、1970年代に学生会館が焼失していることなど、わたし自身も知らなかった事柄が複数ありました。

キャンパスに残るそうしたもののなかで、多くの学生のみなさんが目にしながらあまり気にとめていない構造物の一つに中央講堂とD号館の間に存在する「^{せいちゅうひ}旌忠碑」があるように思います。この碑も実は、ヴォーリズ設計事務所の設計によるもので、1940年に竣工しています。旌忠碑の「旌」とは「あらわす」という意味を持つ漢字で、「忠」を「あらわす」碑ということになります。その意味と竣工年からおよそ予測がつくかもしれませんが、これは日中戦争で犠牲となった学院関係者の慰霊碑であり、同時に当時の国家への忠誠が様々な形で示されているものでもあります。戦時体制下という時代状況を強くうけたものですが、現在は、その歴史的文脈と平和への祈りなどが記されたプレートを設置したうえで、残されていて、平和を考えるきっかけになるものとなっています(『天を見あげて』図録、112頁)。



旌忠碑(手前にプレート)

こうした戦争の影響は、2月17日から4月26日までの日程で開催の平常展「NOBLE STUBBORNNESS —関西学院大学体育会のあゆみ—」でも、複数の文脈でみることができました。例えば、総力戦体制下の1941年、馬術班や射撃班からなる陸上科と飛行班・滑空班からなる航空科によって構成される国防部が、体育会の一つとして新設されたり、グラウンドが三重海軍航空隊西宮分遣隊によって徴用されていたりする事実など(いずれも展示パネルによる)は、当然あり得る事柄ではあるものの、その影響範囲の大きさを改めて知らせるものでした。

再びヴォーリズの建築に戻るならば、今号でも改めて紹介している時計台階段手すりのアイアンワークもまた、戦争に関わる事項です。このアイアンワークは、やはり総力戦下の1940年代に金属供出の対象となり撤去されたものです。ここでは詳細は省きますが、このタイミングから80年以上が経過してもなお、撤去されたままになっていました。現在、この復元のための寄付を募っているわけですが、博物館としては、この復元企画は、寄付をいただくこと以上に、この活動をきっかけとして、戦争がもたらした影響が私たちの身近なところにも今もって残り続けていることに気づいてもらい、同時に、不安定な情勢にあるこの2020年代の世界において、平和について、学生のみなさんをはじめ、多くの人びとに改めて考えてもらえる機会となつてほしいと意図していることでもあります。先に記した、旌忠碑や体育会のことと併せて、現在の学び舎から、戦争のことをさらには平和について想いを深めてもらいたいと思います。また、大学博物館とここの展示が、そうした思索の端緒となればと願っています。

今年度は、副館長の交代がありました。昨年度までの副館長であった橋本祐樹・神学部准教授が特別研究期間のため交代し、今年度からは、山川暁・文学部美学芸術学専修教授が副館長を担当することとなりました。山川副館長の京都国立博物館での厚い蓄積は、大学博物館にとっても大きな力となることと思います。新体制の関西学院大学博物館へのご支援を引き続きよろしくお願いいたします。

(大学博物館長 濱田琢司)

展覧会報告 I

企画展

大学博物館開館10周年記念

天を見あげて

関西学院のヴォーリス建築

ヴォーリス没後 60 年、大学博物館開館 10 周年を記念し、原田の森と上ヶ原の両キャンパスに建てられたヴォーリス建築の詳細をご紹介します。

2024.9.28(土)▶12.14(土)

※休館：日曜日(但し11月24日(日)は開館)、
10月28日(日)、11月18日(日)、11月23日(土)

協賛：株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所

後援：関西学院大学建築学部ヴォーリス研究センター、西宮市

協力：株式会社竹中工務店

開館日数 65日

入館者数 5,168人

天を見あげるキャンパス

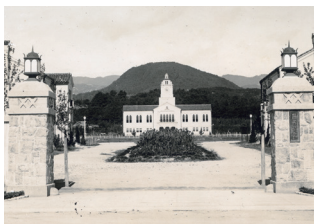
ヴォーリスが蒔いた芥子種

上ヶ原キャンパスは西に向かってわずかに登り勾配をもち、正門から校地に足を踏み入れると正面に甲山が見えます。そのため展覧会タイトルは「山を見あげて」の方がいいのでは、というツッコミが入るかもしれません。「天を見あげて」というタイトルはキャンパスを設計したW. M. ヴォーリス (William Merrell Vories, 1880-1964) の詩「芥子種」(1907年)にある「それは寂しい土地であったが 彼は天を見あげつつ 望みなき人々に愛の音ずれをもたらし」(一柳米来留『失敗者の自叙伝』より妻の満喜子による邦訳)から採りました。

「芥子種」が書かれた1907年はヴォーリスが自給自足の宣教をはじめた年です。彼は1905年、24歳のときにYMCAの紹介で英語教師として滋賀県立商業学校(現在の滋賀県立八幡商業高等学校)に赴任し、課外での活発な伝道活動をおこなっていました。しかし来日から2年後の1907年、生徒に対するキリスト教への感化をめぐって反発を受け、教師の職を失います。そこで帰国するのではなく、派遣された八幡の地に留まり宣教活動をおこなうことを決意しました。この頃から自身は一粒の芥子種であり、それを蒔いて八幡を「神の国」にするというビジョンを描いていたのです。この詩には彼の信仰や宣教への思いがあらわれています。

上ヶ原キャンパスの正門から甲山への軸線を中心とした配置からは、詩編第121編の聖句「私は山々に向かって目を上げる。私の助けはどこから来るのか。私の助けは主のもとから 天と地を造られた方のもとから。」(聖書協会共同訳)が想起されるとともに、ヴォーリスが自身の詩

に「天を見あげつつ 望みなき人々に愛の音ずれを」と記した心が重なります。キリスト教主義の関西学院に深く通じるヴォーリスの言葉を展覧会のタイトルに込めました。



◀正門から見た甲山
1930年頃(『河端家所蔵アルバム』より)
現在も建物の配置は変わっていません。正門と甲山の間に建える時計台は図書館として建てられました。現在は大学博物館が入っています。



◀キャンパスツアーの様子

関西学院のヴォーリス建築は1912年竣工の神学館(原田の森キャンパス、非現存)からはじまり、1959年竣工のランバス記念礼拝堂と体育館、学生会館(上ヶ原キャンパス)までの約50年間に、さまざまな目的で作られました*1。大学の発展によるキャンパスの拡充のなかで解体された建物もありますが、ヴォーリスが建築設計を通して蒔いた芥子種は今も学院のなかに生き続けています。

*1 ヴォーリスは1957年にくも膜下出血で倒れ療養生活に入ったため、1959年竣工の3棟の設計に彼が携わったかは定かではありません。



◀会場の様子
(数口雄也撮影)
原田の森と上ヶ原に建てられたヴォーリス建築の図面とその建物写真、映像のほか、手すりや窓ガラスなど実際に使われた建物の一部も展示しました。

天を見あげて

関西学院のヴォーリス建築

2024.

9.28(土)▶12.14(土)

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は午後4時まで)
休 日：日曜日(但し11月24日は開館)、
10月28日(日)、11月18日(日)、11月23日(土)
関西学院大学博物館(西宮上ヶ原キャンパス2階)
※本展覧会開催期間中は、本館の常設展示は休館となります。
(入館無料)
協賛：株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所
後援：関西学院大学建築学部ヴォーリス研究センター、西宮市
協力：株式会社竹中工務店

「関西学院とヴォーリスの歩み」
講師：山形 政昭氏
開催場所：大学博物館(西宮上ヶ原キャンパス2階)
日時：2024年9月28日(土) 14:00～15:45
会場：西宮上ヶ原キャンパス2階
社会学部21号教室
後援：西宮市



開催記念イベント

講演会とキャンパスツアー

会期初日であり、開館10周年の記念日でもある9月28日(土)に講演会「関西学院とヴォーリスの歩み」を開催しました。前半はヴォーリス建築研究の第一人者である山形政昭氏(関西学院大学国内客員教授)より原田の森と上ヶ原の両キャンパスにおけるヴォーリス建築の特徴をお話いただき、後半は学院のヴォーリス建築に明るい田淵結氏(関西学院大学名誉教授、関西学院元院長)と山形氏による対談と質疑応答です。スパニッシュ・ミッション・スタイルが採用された理由や神戸女学院の建築群との比較など、場内から次々と質問の手が上がりヴォーリス建築への関心の高さがうかがえました。



▲講演会の様子 山形氏(左)、田淵氏(右)

11月7日(木)と12月2日(月)には石榑督和氏(関西学院大学建築学部准教授)によるキャンパスツアーを予約制でおこないました。時計台、神学部校舎のチャペル、ランバス記念礼拝堂、正門、学院本館(外観)、旌忠碑を巡る40分のツアーです。石榑氏は本展出品資料である時計台ロビーの階段手すりに施されたアイアンワーク(金属製の装飾)の木製模型制作を担当された方でもあります(詳細は前号参照)。制作時の発見など、担当者ならではのエピソードもお話いただきました。大学博物館は寄付金を募り、鋳造での装飾復元を目指しています。 寄付金の詳細▶



展覧会報告 II

平常展

NOBLE STUBBORNNESS

— 関西学院大学体育会のあゆみ —

関西学院大学体育会の歴史についてご紹介しました。

2025.2.17(月) ▶ 4.26(土)

※休館：日曜日、祝日

開館日数 58日



平常展

NOBLE STUBBORNNESS

— 関西学院大学体育会のあゆみ —

2025.2.17(月) ▶ 4.26(土)

関西学院大学博物館（西宮上ヶ原キャンパス時計台）
開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は午後4時まで）
休館日：日曜日、祝日
（入館無料）



大学博物館は年に数回、「平常展」という展覧会を開催しています。当館を訪れてくださるみなさまとともに本学のあゆみを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

開館10周年を迎えて

初めて体育会に着目した展覧会

当館は2024年9月28日に開館10周年を迎えました。これまでの平常展では、学院創立の地である原田の森（現在の神戸市灘区王子公園付近）や歴代（初代～第4代）院長、上ヶ原への移転、校歌に関する資料を中心に展示してきました。一方で学生スポーツについても、本学のあゆみを語る上で欠かせません。そこで今回は大学博物館として初めて、関西学院大学体育会43部（運動部42部と学生本部）の歴史をご紹介することにしました。

本展では優勝旗やトロフィー、総合関関戦のポスターなど、実物資料46点と映像資料3点から、創部の経緯や練習風景、各部の活躍についてご覧いただきました。また、卒業アルバムの写真や学生新聞（関西学院新聞、関学スポーツ）の記事をパネルで展示し、競技に励む学生の姿や過去のユニフォーム、体育会の行事などをご紹介しました。



▲展示室の様子

原田の森で学生会運動部が結成

関西学院の創立と体育会の起源

関西学院は1889年に神戸東郊の原田の森で創立しました。創立以来、体操科目の授業や寄宿舎での生活、外国人宣教師による外来スポーツの持ち込みを通じて、相撲やサッカーなどのスポーツがおこなわれていました。

1912年6月29日には、関西学院専門学生会の発会式が開催されました。この組織は運動部、宗教部、学芸部、音楽社交部で構成され、運動部に庭球会、野球会、武芸会、端艇会が設けられました。これが、2024年時点で約2,600名の学生が所属する関西学院大学体育会の起源です。関西学院大学体育会同窓倶楽部（K. G. A. A.）が2012年に発行した名簿によれば、体育会の最初の卒業生は7名（学生本部1名、庭球部4名、硬式野球部2名）であり、1916年の卒業でした。

1920年代になると運動部が次々と結成されました。創部当初は部員が集まらないこともあり、1923年に寄せ集めのメンバーでバスケットボールの試合をしたという記録が残っています。

庭球部で生まれた“NOBLE STUBBORNNESS”

体育会モットーの誕生

現在の関西学院大学体育会のモットーである“NOBLE STUBBORNNESS”（ノーブル・スタボネス）は、原田の森時代に庭球部で生まれました。

庭球部は1916年7月から1920年6月まで官立神戸高等商業学校（現在の神戸大学）と7回対戦し、全敗に終わりました。これを受け、1920年当時の主将である朝長正男（1898-1983年、1922年高等商業学部卒）は、部長（顧問）の畑歙三（高等学部教授）に、庭球部に最も必要と思われる標語

を考えてほしいと依頼しました。畑はアメリカ留学中に、アメリカの選手が粘り強くボールを打ち返して勝つのに、日本の選手が勝ちを急いでミスを繰り返すという光景を見ていました。これを踏まえ、畑は「高貴な粘り」を意味する“NOBLE STUBBORNNESS”を提唱しました。

このフレーズは、イギリスの詩人であるJ. ドライデン（1631-1700年）の詩に登場します。本展ではドライデンの詩が収録されている書籍（大学図書館所蔵）を展示しました。

より良い練習環境を求めて努力した学生

試合の成績だけでは語れない歴史

本展の特徴は、試合の成績だけではなく、体育会をより良くするために努力した学生の存在に注目している点です。例えば、グラウンド（現在のG号館など）の改善に関する希望書や、自動車部の陳情書をご覧いただきました。これらのほか、各部の記念誌に掲載されている卒業生の回想や当館にお寄せいただいた思い出話をパネルで展示し、創部時の苦悩や活動中に直面した問題にまつわるエピソードなどもご紹介しました。



▲思い出話をお寄せいただいた宇良和輝関（相撲部出身、木瀬部屋、2月27日撮影）



次回の企画展



2025年5月19日(月)～7月19日(土)

※休館：日曜日、6月19日(日)

会期中、展示替えをおこないます。

展示資料の詳細はWebサイト掲載の出品リストをご覧ください。

前期 5月19日(月)～6月18日(日)

後期 6月20日(金)～7月19日(土)

後援：大正イマジュリィ学会、西宮市



棟方志功《鴨》* 制作年不詳
*のついた作品名は当館による。

当館には、蔵書票、豆本、版画など1万点を超える原野賢吉氏のコレクションがあります。この原野コレクションは1930年代から2000年代に制作された蔵書票を中心に構成されており、そのなかには前川千帆や川西英、川上澄生、畦地梅太郎、棟方志功といった昭和を代表する作家たちの作品も含まれます。本展は原野コレクションを主とした蔵書票の展覧会です。

蔵書票とは本に貼られる小さい版画のことです。その持ち主を明らかにする役割があります。15世紀にヨーロッパで生まれた蔵書票は、明治時代に『明星』や『白樺』といった文芸雑誌を通して日本にもたらされました。以来、創作版画の作家たちによって作られるようになり、メゾチント、エッチング、板目木版、木口木版、型染などさまざまな技法で制作されました。

そこで本展では、日本の蔵書票に見られる技法の多様さとそれによる色彩豊かな表現を蔵書票の「カラフルさ」と捉えました。蔵書票の技法に注目することで、創作版画の歴史における日本の版画表現の展開をお見せします。

「カラフル」な蔵書票は用途としての枠を越

え、小版画としても鑑賞され、愛されています。1943年には蔵書票をカレンダーに貼った書票暦が生み出されました。これは日本で蔵書票を広めるのに貢献したといわれています。

また、蔵書票は選集である書票集の形にまとめられ、愛好家たちの間で頒布されることもあります。書票集の多くは小部数のみ制作されます。作品の選別や紙材、製本方法など、編集した愛好家のこだわりが詰まっています。会場では書票暦や書票集から蔵書票が愛好される様子についてもご紹介します。

併せて、本展では蔵書票に関連する事柄をご紹介します「小話」というコラムを設けました。ここでは型染版画と和紙の関係や豆本について展示します。1935年から武井武雄が毎年刊行した武井武雄豆本(のち、武井武雄刊本作品)をきっかけに日本各地で豆本が刊行され、昭和の豆本ブームが起こります。前川や棟方といった蔵書票の制作者たちも豆本に携わっており、彼らの創作活動の広がりが見てとれます。

蔵書票の「カラフルさ」、そしてその周辺の諸相をぜひご覧ください。

【開催記念イベント】

「銅版画の蔵書票ができるまで
解説&刷りのデモンストレーション」

講師：若月公平氏

(版画家、東北芸術工科大学名誉教授)

日時：6月13日(金) 13:20-15:00

場所：関西学院会館 翼の間

＊聴講無料、事前予約制(定員60名)

＊詳細は当館webサイトまたは本展覧会のチラシをご覧ください。



川西英《港》* 制作年不詳



前川千帆《けいすけあいしょ》
制作年不詳



関西学院大学博物館通信 第18号

KGU MUSEUM NEWS No.18

2025.4.20

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ケ原一丁目1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <https://www.kwansei.ac.jp/museum>